

# 新着図書

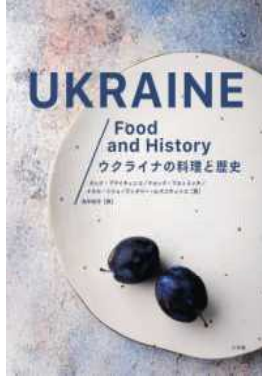


## 「ウクライナの料理と歴史」

オレナ・ブライチェンコ 著

世界有数の穀倉地帯で、“世界のパンかご”とも呼ばれてきたウクライナには、四季折々の豊かな食材や人々の暮らしのなかで培われてきた食品加工や保存の技術、そして、多彩な食文化があります。

日本ではロシア料理に分類されがちなボルシチが、実はウクライナ発祥だったり、東スラブの伝統の源とも言える存在。そんなウクライナ料理を重要な文化財として発信するプロジェクトのもと制作された本です。



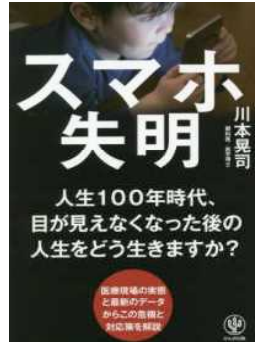
## 「スマホ失明」

川本 晃司 著

「スマホで失明」って大げさなと思ったあなたへ。「はじめに」の「ある高校生に起こった悲劇」だけでも読んでください。

デジタルデバイスの急速な普及による「スマホ失明」リスク。

わかりやすい例が、若い人、特に10代の間で「急性スマホ内斜視」の患者さんが目立つようになってきたことです。人生100年時代という超長寿時代の現代、わずか16歳の若さでダブって見える病気を発症したことは、残り80年の人生の質を大きく下げることです。



## 「『みんな違ってみんないい』のか？」

山口 裕之 著

正しさは「人それぞれ」、といって他人との関係を切り捨てるのではなく、「真実は一つ」といって自分と異なる考えを否定するのでもなく

考え方の異なる者同士がともに生きていくために、「正しさ」とは何か、それはどのようにして作られていくものかを考える。

私たちは相対主義と普遍主義の間の道を、どろかに落っこちないように気をつけながら進まなくてはなりません。



## 「『覚える』と『わかる』知の仕組みとその可能性」

信原 幸弘 著

「理解する」とはどういうことか？空気を読む際、私たちの頭と感覚は何をどう察知しているのか？

意外な事実…。意味が分からない暗記も役立つ。正しい判断には感情が必要。直感は議論にも使える。

丸暗記、身体で覚える、まねるといった学習の基本から直観、批判的思考、知の可能性までを探っていきます。

頭の中で何かが起きている!?



## 「気象病ハンドブック」

久手堅 司 著

気象病…気圧や気温、湿度など、気象変化によって引き起こされる身の不調のこと。

- ・梅雨や台風の時期になると体調が悪くなる。
- ・季節の変わり目に頭が痛くなる。
- ・天気が悪いとめまいがひどい。
- ・天気予報を見なくても雨が降ることがわかる。

症状は多岐にわたり、時にメンタルへ影響をきたすため、「気にしすぎ」と言われてしまい、なかなか周囲に理解してもらえません。気象病の正体・治療・対策まで伝えます。



## 「恋とそれとあと全部」

住野 よる 著

片思い男子とちょっと気にしすぎな女子。二人は友達だけど、違う生き物。一緒に過ごす、夏の特別な四日間。めえめえ(瀬戸洋平)は下宿仲間てクラスメイトの女子サブレ(鳩代司)に片思いをしている。告白もしていないし、夏休みでしばらく会えないと思っていた。そのサブレが目の前にいる。サブレは夏休み中に遠方にあるじいちゃんの家に行くのだった。「じゃあ一緒に行く?」「うん」思いがけず誘われためえめえは、部活の休みを利用してサブレと共にじいちゃんの家を目指す。



## 「あなたはここにいないとも」

町田 そのこ 著

ほどいてつないで私はもう一度踏み出せる。出会いも別れも愛おしくなる物語。恋人に紹介できない家族、会社でのいじめによる対人恐怖、ずっと側にいると思っていた幼馴染との別れ——いまは人生の迷子になってしまったけれど、あなたの道しるべは、ほら、ここに。



## 「川のほとりに立つ者は」

寺地 はるな 著

カフェの若き店長・原田清瀬はある日、恋人の松木が怪我をして意識が戻らないと病院から連絡を受ける。松木の部屋を訪れた清瀬は、彼女が隠していたノートを見つけたことで、自分に隠していた秘密を少しずつ知ることになり、「当たり前」に埋もれた声を丁寧に紡ぎます。

